
幻想郷虚空情報統制機構

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷虚空情報統制機構

【Nコード】

N3242R

【作者名】

蜘蛛の血

【あらすじ】

とある警察的な機関がある。

だが、警察と呼ぶには周りからの偏見や悪口が絶えない
正式名称世界虚空情報統制機構。通称「統制機構」や「図書館」などと呼ばれている。

そんな機関の中で一部の人間が行方不明になっている。

第四師団師団長ジンキサラギ少佐

第四師団ノエルヴァーミリオン少尉

第零師団ツバキヤヨイ中尉

統制機構技術者レリウス「クローバー」大佐

諜報部ハザマ大尉

諜報部マコト「ナナヤ」少尉

彼らは一体どこへ行ってしまったのか

Prologue (前書き)

思い付きです。

更新はかなり遅めです。

どうぞ

prologue

とある酒場

「はあ、最近ろくな仕事がありませんねえ。」

「まあ、そう腐ることもないだろうハザマ大尉。」

「クローバー大佐は忙しいかもしれませんが我々は結構やることないんですよ。」

「……それもそうだったな。」

ところで、なぜこんなにも集まっている。

師団もバラバラの上、共通点がよくわからない。」

「いや、共通点ならありますよクローバー大差。」

「ほう、例えばどうなんだ、ヴァーミリオン少尉？」

「あれですよ。本編のゲームで出演してるという共通点が。」

「ああ、確かにね。」

ところでクローバー大佐？」

「何だ、マコト＝ナナヤ少尉。」

「カルル君どうしたんですか？ クローバー大佐のお子さんでしたよね？」

「ああ、カルルか。最近咎追いになったと聞いたが。」

「へー、あのカルル君がねえ。」

いろいろと言っではいけない事情などを話しながら酒盛りをしている。

「でも、珍しいことがあるものですね。」

さっきクローバー大佐が言ったように私たちの共通点なんてノエルが言ったように本編に出演しているところしかありませんし。」

「大体の関節は君たち三人だな。」

僕に関してはツバキが親戚だということとそこのヴァーミリオン少尉と同じ師団だということ。

ハザマ大尉に関してはマコト＝ナナヤ少尉と同じ師団であること、

クローバー大佐はハザマ大尉と仲がいい。」

共通点やら何やらを話していると、酒が回ってきたのか。

「なんでキサラギ少佐は私に敵しいんですかー！」

「貴様は似すぎている！」

「ちよつと、いきなり氷翼ばなさないてくださいよ。」

こつちも危ないんですから。」

いろいろと大惨事になりかけていた。

そんな時……

「ふえ？」

「どうしたののえるん？」

「落ちてない？」

「え？」

「ああ、落ちてるな。」

「なんでそんなに冷静でいられるんですかー！」

空間の裂け目に落ちた。

「うう、うえええ〜。」

「吐かないでくれハザマ大尉。」

「こ、これは失礼。」

私、お酒にはそこまで強くないもので。」

「駄目じゃないですかハザマ大尉。」

アタシなんかまだまだ行けますよ！」

「マコトは飲み過ぎよ。」

「君たちは未成年じゃないのか？」

「『ギクツ！』『ギクツ！』」

ある程度の衝撃で半分ぐらい酔いがさめた。

「で、此処はどこだ？」

「さあ？ 落ちたつてことはカカ族の村あたりじゃないですか？」

「か、カカ族！？ 私猫は苦手なんですよ。」

「気が合いますね、ハザマ大尉。」

「貴方はDNAの問題でしょうがナナヤ少尉。」
「テヘツ そうでした。」
「そんなことよりも、さっきから変な気配が。」
「それはイグニスのことか？」
「違うな。もっとおかしな、とりあえず人間のものではない。」
「此処は一体どこなのか。」
果たして彼らは戻れるのか。」

Prologue (後書き)

ここからどうしてしましようか。
それでは

はじめ (前書き)

本当に更新が遅いです。
どうぞ

「うん？」

飲み会の途中に急に落下して居場所がつかめない統制機構の方々。
飯「で、此処はどこだ？」

蛇「とりあえず、あの猫どものところじゃないのは確かですね。」

飯「それはそうだ、ここでは空が広がっている。カ力族の村はカグ
ツチができるときに太陽を奪われたと聞く。」

鼠「んー？ 川が近くを走っていますね。」

椿「川？」

鼠「うん。ちよつと水気があるからね。」

銃「それもやつぱ、尻尾で感知してるの？」

鼠「まあね。ちよつと湿気があるだけでもすぐにしおしおになっ
ちやうから。」

氷「水があるならそこを指すに越したことはないだろう。
生きる上で水は最重要だ。」

と、言うわけで近くにある（らしい）川に向かうことにした。

川

蛇「すごい川幅ですね。」

鼠「そうですね。でも、霧がかかっていてよくわかりませんね。」

椿「これは、魔素の霧なのかしら？」

銃「そんなことよりも、なんだろうね？ 此処。」

飯「ここら一带に赤い花が咲いているな。これは確か曼珠沙華まんじゆしゃげだっ
たか。」

「そう、またの名を彼岸花。」

氷「誰だ貴様……」

急に後ろに気配を感じるとそこには大きな鎌をもった女性が立っ
ていた。

「まあ、そう構えないでいいから。」

あたいの名前は小野塚小町。此処、三途の川の先導をやっている死神さ。」

仮「そうか。今の世の中、死神なんかが普通にいるのか。」

銃「いやいやいやいや、クローバー大佐、いくら世の中おかしくなっているとしても死神は実在しないと思いますよ。」

仮「いや、でもこの人は死神と言っているぞ。通り名とかではあるまい。」

蛇「もしかして、此処って三途の川ですかね？」

「ご明察。その黒い人は察しがいいね。その通り、此処は死んだ人がわたる三途の川だよ。」

ま、此処まではさっき言ったからいいとして。あんたたちどこから来たのさ？」

椿「私たちは、第十三階層都市カグツチにいたはずなのですが。」

鼠「どういうわけか、こんなところに来ちゃったわけですよ。」

「なるほどね。なんか、死ぬようなことしなかった？」

銃「いえ、そんなことをした覚えは。」

ただ、此処に来る前はみんなで飲み会を。」

「へえ、つまりまだ死んでないってことだ。」

じゃあ、此処を渡すわけにはいかないね。」

氷「三途の川なんて渡りたくもない。」

仮「そこは同意しよう。」

なんだかんだで死にたくはない様子。

それはさておき 閑話休題このままここにいるわけにもいかない。

蛇「ここから、カグツチに行くためにはどうすればいいでしょうか？」

「ああ、確か第十三階層都市カグツチだっけ？ そんなところはこの世にはないよ。」

下界の幻想郷にもそんなところは聞いたことがない。」

氷「幻想郷？ なんだそこは？」

初めて聞く単語が出てきた。

「ま、知らなくても仕方ないか。なんせ、此処自体あんたらのいた世界のとは違うからね。」

ここからじゃ、下界に戻ったとこで、幻想郷に行っちゃうだけだし。」

鼠「戻る方法は、あつたりしないんですか？」

「あるにはあるんだけどね。」

一応戻る方法は、あるらしいのだが……

「その人は神出鬼没でどこにいるかわからないんだ。しかもその人は恐ろしく強いからね。」

ま、一応名前だけは教えておくよ。その人の名前は八雲紫。誰もが認める大妖怪さ。」

仮「死神の次は妖怪か。どうやら、その幻想郷という場所は何でもありらしいな。」

「そんじゃ、とりあえず下界に落とすよ。」

全「は？」

落とされた。

どう？（後書き）

短ええ！

展開を長続きさせる書き方を考えねば。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3242r/>

幻想郷虚空情報統制機構

2011年7月27日22時37分発行